

A fluffy white and black dog is lying in a grassy field. The dog's head is visible on the left side of the frame, looking towards the camera. The background is a dense field of green grass with some small yellow flowers scattered throughout. The overall scene is peaceful and natural.

寝床屋の無料配布

・田楽いも

……

3

その夜。小梅婆さんはチロリの長屋でしこたま酒を呑んで、千鳥足に端唄なんぞを口ずさみながら、真つ暗な裏長屋を歩いていた。

「婆ア！ 転びやがっても面倒見ねエぞ！」

後ろからチロリこと、勘造が怒鳴る。勘造は長崎で外道(糺)を修めた医者だ。だが、色々の事情があつて十軒店に流れ着き、これまた色々の事情から、この裏長屋で医者をやっている。ただし、腕は良いのだが酒が入っていないと物の役にも立たないチロリ(罎をつける酒器)のようだと言う意から、チロリ、あるいはチロリ医者などと渾名されている男だ。

「エエ、興ざめだヨ、この藪医者！」

小梅婆さんも負けじと怒鳴り返したところに、寝静まっていた長屋の一つから、うるせえ！ と怒鳴り声が響いた。

「お黙りよう。エエ、好かねエ」

悪態を吐いた小梅婆さんは、ふと何かに足を取られてよろけた。真つ暗な裏長屋は、

僅かに物の形が見えるばかりで、足元に何があつてもなくても判りはしない。

「そら見たことか。言わんこつちやねえ」

「おいおい、大丈夫かえ？」

勘造の呆れたような罵りと、辰之進の心配するような声が後ろから聞こえて来る。

「この小梅様をツケえにすると承知しねえぞ。あんな水みたいな安酒如きで酔うもんかエ」

危うく踏みとどまった小梅婆さんが腹立ち紛れに文句を言う。

「おいおい、灘の上物を飲んで水たあ、とんだ悪酔いだぜ」

付け届けのお裾分けだと言つて、今夜の酒を持つてきた辰之進が文句を言う。

「そいつア謝つた。ナニ、酒如きで足元が覚束なくなる妾わっちじゃねエと言う意味サ。それより何かが転ばしたのヨ」

「もう二度は転ばされてるじゃあねえか。それで怪我してりやア世話アねエぜ。動けねえくせに口だけは達者じゃア長屋連中の迷惑にならアナ。どうせ転ばされるなら、どうぞ口から転んでくんナ」

もう既に長い付き合いとなつた勘造は、小梅婆さんを遠慮なく罵倒した。

「お前の減らず口に蓋して、鑄掛てやろうから覚えておきな」

もちろん同じように付き合いの長い小梅婆さんも黙ってはいない。そう強気の捨て台詞を吐いて、自分の長屋の腰高障子をピツシヤリと閉じた。

「ありや大丈夫だな」

「そうだな」

辰之進と勘造は呆れたように笑った。

翌朝、ぎよえええ、と言う叫び声が長屋に響いた。小梅婆さんを見送った後に飲み直し、そのまま寝落ちした辰之進と勘造は、その只ならぬ噪音に叩き起こされたことになった。後に語った際、麻布を引き裂いたようだったと言う意見と、河童の断末魔のようだったと言う意見で、どちらが適切かかなり揉めたとか。

「……なんだエ……」

「ウウ、頭にズキズキと響きやがらア……」

のそりと起き上がると、しこたま残った酒精でぐらりと視界が回った。途端にドンドン、と腰高障子が乱暴に叩かれる。

「ウウ……」

「オオ……」

勘造と辰之進は揃って頭を抱えた。ぐわん、がん、ごん、と全ての音が頭どころか身体中に響いて、激しく揺さぶられたようだ。

「エエ、開けねえ。開けねエナ！ コレサ、チロリ、お開けヨウ」

ナマズが大暴れして、この世の全てが揺れるような衝撃の正体は、どうも小梅婆さんらしい。

揺れの間隙を塗って、ヨレヨレとしながら辰之進が起き上がる。が、計ったように婆さんが再び「エエモ、開けねえナ！」との大音声で腰高障子を叩いてぐわりぐわりと揺さぶるものだから、へにやりと辰之進がへたり込んでしまう。

勘造は端から起き上がることもできず、頭を抱えて突っ伏している。

二人にとっては、目が覚めたら地獄で、獄卒に責め立てられているようであった。

「わ……っ！ わっ……！」

やっこの思いで腰高障子に取りつき、心張り棒を外してガタピシと苦労しながら開けると、その向こうに立っていた小梅婆さんは、カッと目を見開いた尋常ならざる様

子で仁王立ちしたまま、わ、わ、わ、と繰り返してばかりいる。

「……わ？」

「……祈祷師呼んで来ねエナ」

「俺ア足が覚束ねエ」

「そんなら俺も頭がクラクラすらア」

勘造と辰之進はそんな小梅婆さんを見て言い合う。

「おふざけじゃないよッ！ 童わっばだっ！ 童わっばがいるんだよ」

小梅婆さんがやつと叫ぶ。勘造と辰之進はごおんと耳元で時の鐘でも撞かれたように、顔を顰めて耳を塞いだ。

「わっば……」

「……たねか、にきちか、やえか、たすけか」

幾らか沈黙した後、勘造が長屋の子供の名前を数え上げる。この長屋に住む子供たちは、それこそ数えきれないほど勘造に診てもらっているから、勘造が名前を言えるのは当たり前でもあった。が、小梅婆さんはぶんぶん頭を振った。

「知らないよう」

「……攫つてきたのかエ」

「攫う前に泣き出してすぐ知れるわエ。婆さんが二つに分かれたんじゃあるまいか」

「シワシワの婆アじゃア、二つに分かれても婆アだろうが」

「エエ、オキヤガレ！ どこぞの誰とも知れねエ童だよ！」

小梅婆さんが叫ぶと同時に、

「うーめー！」

という子供の大きな泣き声が長屋に響き渡った。勘造と辰之進は、その大きさに打ちのめされてヘナヘナとその場にしゃがみ込んだ。

「で、チロリ。その後どうしたエ？」

「どうしたもこうしたも、見たまんまだ」

勘造が渋い顔をして答える。その背には、頭頂部にだけ毛を残す芥子にして、それを紐で結えた子供が背負われて、時々思い出したように手足を動かしている。

「うめ」

ふと子供が呟くと、都合の悪いことは聞こえないのが当たり前の小梅婆さんが耳聡

く聞き取って「オオヨ、梅はここじゃ」と返す。

「お前さんが負ぶってるとは、また珍しいものを見たもんだ」
顔に作った傷を診てもらいながら、患者が笑う。

「婆アが背負ったまま、三和土に落ちやがったんだよ」

小梅婆さんは勘造の長屋に、自分のもう一つの長屋であるかのように当たり前の顔をして出入りしている。なんなら、勘造が越してくる前から出入りしている。

朝は早くから長屋に押しかけて神棚を掃除したり、長屋にいくつかしかない竈で朝飯を作ったりと言った具合だ。それだけだとただの厚かましい婆さんになってしまうが、患者が来る頃には勘造の手伝いをし、押しかけてくる患者を捌く。そればかりではない。勘造の指示の元、壁一面を埋める薬箆笥から必要な薬を揃えて渡したり、時に切ったり縫ったりの治療行為の助手をこなし、更にはどの患者がどれだけ薬代を貯めているのかまでも完璧に把握している。そのうえ、小梅婆さんが朝飯を食べ終わるかどうかと言う頃には上がり框に人が座り始め、更にあつと言う間に長屋の外に並んだ床几まで人が尻を並べる混雑ぶりの中、いつまでも待たされると言う文句を芸者上がりの舌鋒でやり込め、不安から発せられるボヤキを清々しいほどさっぱりした言葉

で蹴散らす。

勘造の狭く小さな診療所は、もはや小梅婆さん抜きでは廻らない。

そんな小梅婆さんは、歳の割に足腰はピンシャンしているがそれでも寄る年波には勝てず、更にどこの誰とも判らぬが「うめ、うめ」と親しげに呼びかけて懐いてくる幼子を背負って動こうとして、普段以上に重くなつた己を支えきれず、框を踏み外した。

辰之進が偶然にも長屋に来ていて、小梅婆さんの傍にたまたまいて咄嗟に支えたので、辛うじて転倒は免れた。が、無傷とは行かず脛をしたたかに打つたのだった。

突然現れた幼子は、小梅婆さんをうめ、と舌足らずに呼び懐いた。

どのくらいかと言えば、負ぶわれたり、抱かれたりするのは誰でも構わないが、小梅婆さんがそばに居ないと、金切り声を上げて泣き喚くほどに懐いていた。

その声の大きさといったら。

どちらかと言うと、ほぼ毎日前夜の酒が残っている状態の勘造にしてみれば、頭の中に金棒でも突つ込まれてごしゃごしゃと掻き回されたような気になる。

一方、全く見知らぬ幼子を恐ろし気に見ていた小梅婆さんだったが、うめと慕って

呼ばれた半日ほどですっかり情が芽生えたらしい。うめ、と呼ばれると必ず返事をし、夜には大好きな酒も止めて早々に自分の長屋に連れ帰るほどだった。

飯も粥の上澄み、柔らかく煮た葉物や芋なんぞを一生懸命こさえては、自分が食べるのも後回しで幼子に付きつきりで食べさせてやっているほどだ。誰よりも先に、誰よりも多くが信条と言わんばかりの普段の婆さんが、まるつきりの他人と入れ替わったようだった。

時には勘造も患者も後回しにされるほどで、一度など朝一番で乗り込んできた大工が、薬を貰えたのが昼を過ぎたということがあって以来、このままでは、満足に薬すら貰えなくなると慄いた患者たちと勘造が、代わりに幼子を抱いてあやすと言う事態になった。

「一体どこの子なんだエ」

やっと順番が回ってきた棒手振りが、捻ったと言う足を手ぬぐいで拭いながら勘造に診せる。そして順番を待つ者たちが勘造の背から取り上げた幼子を、老若男女の別なくあやす様を苦笑いで見た。

「それが判りや、こんな苦勞はしてねえヨ」

「届け出たんだろ？」

「おう。それどころか、浅草だの日本橋だのに行かせてるが、梨の礫だ」

浅草や日本橋には、迷子を尋ね知らせる石標がある。幼子が現れてから早十日。小梅婆さんも「芥子、右手首に火傷跡」などの特徴を載せた紙を張り出した。そして幼子を背負い尋ね方を見て回って帰ってくる。目明かしの手下を努める辰之進も、御用のついでに見て回ってくれている。

それでも、幼子を尋ねる親や知り合いがまるで出てこないのだ。

「十軒店の町医者と尋ねりや、チロリを知らねエワケはねエもんだが。お前エさんもまだまだにわか医者だつてことかねエ」

大工が揶揄う。この頃町医者になるための試験も資格も必要なかったため、誰でも医者を名乗ることができた。形ばかりの間診に高い薬を出して金を取る藪、にわかと思われる医者などもごまんといた。

「にわかがいやなら来なけりやイイ」

棒手振りの言葉にチロリは軟膏を張り付けた足を、晒し布で巻きながら言う。

「オイオイ、誰も来なけりや酒も飲めねエぜ」

「ナニ、これまで待った薬代、たった今すっぱり全部置いてきな」

最後の一卷きを始末して、勘造が手のひらを上にして棒手振りに差し出すと、早く、と催促するようにヒラヒラと上下に振った。

ここへ来る者たちは、薬代を持ち合わせていない場合がかなり多い。代わりにと野菜やおかずを置いていく者ばかりだ。昨今では、銭ではなく物で診てくれる医者だと言う噂でも広まっているのか、ケガをした子供がガラクタを握りしめて来ることもあつたりする。

「おっと、コイツア謝った。払わねエワケじゃアねエ。だが、ちよいと手元が不如意と言うヤツでサ。この通り」

棒手振りが慌てて手を合わせて拝んだ。

「博奕なんぞに使うヒマがあるなら、薬にお使いナ。博奕はいつでも出来るが、お前の足が治らなけりや賭ける銭も出来やしねエヨ」

小梅婆さんが大工の背中を小突く。

「大体、なんで博奕なんぞに手を出したエ？ 釜の蓋が開かねエと女房を泣かす気ならこの小梅様が容赦しねエぞ」

小梅婆さんが低い声で脅すと、何故博奕のことを知っているのかと棒手振りは一瞬慌て、そして言い逃れできないと思つたのか、しゅんと萎れた。

勘造は、ニヤニヤと意地悪く笑つて、

「俺ア、どっちでもいいぜ。ただ婆アは黙つちやいねエみてエだがな」と、手を再び振つた。

「しかし、親が知れねえのが解せねエ」

小梅婆さんが竈から埋めておいた炭を、七輪に移しながら呟く。晩飯に田楽いもを作ろうと思ひ立つたのだ。この裏長屋には竈は三軒しか据え付けられていない。そのうちの一つが勘造の長屋なのだ。小梅婆さんはこの竈をさも自分の物のように使つて飯を作る。勘造はブツブツと文句を言うが、出来上がった菜を酒肴やおかずとして分けて貰つている身では小声で言うのがせいぜいだ。

ここの所酒に付き合わなくなったとはいへ、相変わらず小梅婆さんは竈を使つて飯を作り、いくばくかを勘造たちの分として置いていく。

田楽いもは甘藷さつまいもをおろし、箱に入れて蒸し上げた物を適当な大きさに切つて串に差

し、火で炙る。そこへ好みの味噌をつけて食べるといふものである。

「それを言うなら、婆さんの長屋に現れたてエのも解せねエノ」

「妾の人徳はお釈迦様もご存じサ」

いつものように酒を呑もうと来ていた辰之進が言うのに小梅婆さんが答えると、万年床の上で勘造が茶碗酒を呷りながら、ふん、と鼻で笑った。

「婆アに預けに来たつてエンなら、お釈迦様じゃなくて、さんもとごろうせえもん山本五郎左衛門の方が余程らしいぜ。親が知れねエのも道理じゃねエか」

「オキヤガレ」

小梅婆さんは面白くもねエと鼻を鳴らした。幼子が邪魔だというワケではない。だが、親が名乗り出ないのも、小梅婆さんの長屋に突然いたと言うのも、何故なのか判らない。

附木で火を入れると、炭が再び赤くなってくる。頃合いになったところで網を乗せ、十分に熱してから串に差した芋を乗せた。暫くパタパタと団扇で仰いでいると、芋の焼けるいい匂いが長屋中に漂い始める。すると、あー、と背中で寝ていたはずの幼子が声を上げた。

「おお、おお。お前も芋が好きか。もうすぐ焼けるから、お待ちヨ」

小梅婆さんの背中中で、急かしているようにも、喜んでいるようにも思えるほどにジタバタと手足を動かす。

「出来た出来た」

じつくり焼いた芋に、薄く薄く味噌を塗ると、小梅婆さんは小さく切つてふうふう、と冷ます。狭い座敷に座らされた幼子は我慢できぬ、と言わんばかりに匙に差し出されるより早く、自ら迎えに行くように大口を開けてぱくりと食べた。

「オヤオヤ、よほど腹が減っていたと見える」

小梅婆さんは揶揄うように言つては、もう一匙切つて、ふうふうと冷ました。それもぱくりと食べて、幼子はもつと、と強請るように手足をバタバタさせた。

「コイツア、大きくなったら酒飲みになるぜ」

辰之進が酒で少し赤くなつた顔で笑う。辰之進は山椒味噌、勘造は山葵味噌をつけて、田楽いもを頬張つた。

「そこは婆アに似たか。ウウ、未恐ろしい」

勘造は大げさに肩を抱いてぶるぶると震えて見せた。

「随分と嬲るじゃアねえか。そこまで言うなら、残りの田楽いもはお預けにしてやろうか」

小梅婆さんがふん、と鼻を鳴らして言う。

「俺もかエ。飛んだ巻き添えだ。こいつア謝る」

喜の字屋や飲み屋などで肴を誂えてくることもあるが、今日は何もない。小梅婆さんをアテにしていた辰之進が慌てて、勘造を叩き、謝れと身振りをした。

「チッ。謝る」

「おや、なんぞ声がしたようだ」

「都合よく遠くなるの」

「声の大小じゃねエ。心しんが足らねエから聞こえねエのサ」

不機嫌な勘造の言葉に、ふふん、と小梅婆さんが笑う。

「うめ、もつと。もつとくれ」

急に太い声が聞こえて、辰之進、勘造、小梅婆さんのやり取りがピタリと止まった。

互いに顔を見合わせて、己じゃないと首を振る。そして、恐る恐る、まさかと言う気持ちで幼子の方をみやると、そこには人とも何とも言えないような塊がいた。

ぎよえええええ、と再び麻布を引き裂いたような、河童の断末魔のような小梅婆さんの叫び声が長屋中に響いた。途端に、塊はぼわんと煙を上げる。小梅婆さんは思わず、煙を防ぐように腕で顔を覆った。

「次は山椒味噌がいい」

そんな声が聞こえてひゆう、と一陣の風が長屋を吹き抜けていった。煙が晴れた後には、くたりと崩れた幼子の着物だけが残っていた。

「……酒が頭に廻りやがったかねエ」

「……化かされたんだヨ」

辰之進が目を瞬くのを、勘造がぼんやりと言った。小梅婆さんの叫び声が大きかったが、二人も十分に驚いて悲鳴を上げていたのだ。

「ああ……」

小梅婆さんがぼそりと呟く。何故狸が。ふと脳裏に蘇るは大昔に長屋へ迷い込んできた子狸だ。迷ったのかうっかりか判らない。普段なら火に近寄ることもしないはずだ。だが、人里を当てなくうろついて余程腹を空かせていたのだろう。小梅婆さんが焼いていた田楽いもを盗ろうとして、七輪を触ってしまった。怪我の痛みと人への怯

えから威嚇し引つ搔いてくる子狸をなんとか捕まえると、軟膏を塗ってやった。そして「田楽イモが食いたけりや、せめて化けて出てきな」と、言葉なんてわかるはずもないのに話した覚えがある。

軟膏が効いたのか、効かなかったのか。幼子の右手首の火傷跡を思い出す。毛は禿げたままになつてしまつたか。

「ああ、そうか。……そうか」

小梅婆さんは、くすりと笑つた。

「ひえええええ、つて叫んだナアどつちだい」

勘造と辰之進が互いに互いを指差す。

「なんまんだぶ、つてお題目を唱えたのもいたじゃアねエか」

小梅婆さんの耳は、人が聞き取つてほしくない所ほど良く聞こえるのだ。再び二人は互いを指差した。どちらも他人になすり付け合っているのに気付いて、一瞬剣呑な目つきで見合う。が、ニヤニヤと小梅婆さんがこちらを見ているので、勘造がおぼんと一つ咳を入れた。

「……そりゃア、親もいねエワナ」

「まア、本当の迷い子じゃなくて良かったじゃねエか。しかし、声も随分と太かったナア。ありやア結構年寄りじゃアねえか？」

あの時の子狸だとすれば、確かに相当歳をとっただろう。

「爺イが子供に化けるたア、図々しいノ」

勘造が、フン、と忌々し気に茶碗を呷って言う。

「なに、どちらも世話される身サ」

「チヨツ。面白くもねエ」

勘造は舌打ちをして、徳利から酒を注いだ。

「それにしても田楽をねだらなきや、判りやアしなかつたものを」

辰之進が狸の化けの皮が剥がれたのを思い出したのか、苦笑いする。

「ナニ、妾の田楽のお蔭ヨ。化け狸も垂涎の逸品でござい」

「ちげえねえ」

どうだと胸を張る小梅婆さんと、それに珍しく賛同した勘造と辰之進の三人で顔を見合わせる、一斉に吹き出してゲラゲラと笑い出した。うっかり田楽いもを強請ってしまった化け狸は、三人の視線を受けると、ほんの僅かな間だったがオタオタと慌

てたのだ。

「まんまと化かされたねエ」

一頻り笑った小梅婆さんは、そうしみじみと言って辰之進から徳利を取り上げると、ごくりと口をつけて酒を呑んだ。山椒味噌の田楽いもを食いに来るだろうか。小梅婆さんの山椒味噌は実と葉を使った特製だ。その時は、酒が飲める姿だと良い。

「ああ、久しぶりの酒は沁みやがるねエ」

「婆ア！ 何てことしやがる」

勘造が長屋中に響くような土間声をあげた。

—
了

1016# エアブー 2022

寝床屋の無料配布

2022/10/16 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

今回は町医者、おばあさん、目明しの手下と言う、
謎なトリオが登場です。

酒に汚くて、特におばあさんと医者は互いに
悪口を言い合うのですが、特に仲が悪いと言うワケ
ではないので、そこはかたなく漂っているハズの
信頼感みたいなものを感じ取っていただければと
思います。

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが
出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

* おねがいとおことわり *

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。